

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

熱帯雨林の英雄か国家の敵か

ブルーノ・マンサーとプナン人の闘い

金沢謙太郎

はじめに

2001 年 9 月 3 日付のアジア版『タイム』の表紙には、ブルーノ・マンサー (Bruno Manser) の顔があった。目次の見出しは「闘いの途中で消息不明」であり、次のように続いている (*Times*, Sep. 3, 2001)。

スイス人活動家、ブルーノ・マンサーは、ボルネオのプナン人¹と彼らの家である熱帯雨林のもっとも熱心な擁護者の一人だった。しかし、マレーシアの木材企業と役人によって危険視された彼の消息は昨年途絶えた。そして、森林は消え続けている。

ブルーノ・マンサーは、欧米のメディアを森に招き入れ、熱帯雨林の商業伐採によるプナン人 (Penan) の生活の侵害について世界の耳目を集めた。「熱帯雨林の英雄 (Rainforest Hero)」と呼ばれた (Suter, 2015)。一方で、サラワク州政府からは「国家の敵 (State Enemy)」と名指しされ、サラワク内での彼の行動は警察から追跡されていた。

2003 年 6 月の JAMS News で奥野克巳は「ブルーノ・マンサーの死とプナン人の闘いの変貌」という研究短稿を寄稿している (奥野, 2003)。2001 年 8 月と 2002 年 8~9 月にバラム河 (Baram) 流域で奥野自身が行った現地調査を踏まえて、ブルーノ・マンサーの死を一つの区切りとするプナン人の抵抗運動の変化を報告したものである。それによれば、プナン人の林道封鎖は、「伐採を阻止し、生活を守るための手段 (ブルーノが国際的な関心を牽引した時代) から、政府と企業に対して生活水準の向上に向けて要求を通すための手段 (ブルーノがいなくなった時代) へと変貌を遂げた」とされる。また、ブルーノ

¹ 2010 年のサラワク州政府統計局のセンサスによれば、同州の人口は約 247 万人である。そのうち先住民族の占める割合は 7 割にのぼる。最も多いのはイバン人 (Iban) で、次いでムスリムのマレー人 (Maly) とムラナウ人 (Melanau)、ビダユウ人 (Bidayuh) と続く。その他の先住民族として、「上流の人びと」を意味する「オランウル (OrangUlu)」がいる。オランウルには、カヤン人 (Kayan)、クニャ人 (Kenya)、クラビット人 (Kelabit)、サバン人 (Saban) のほか、プナン人などが含まれる。

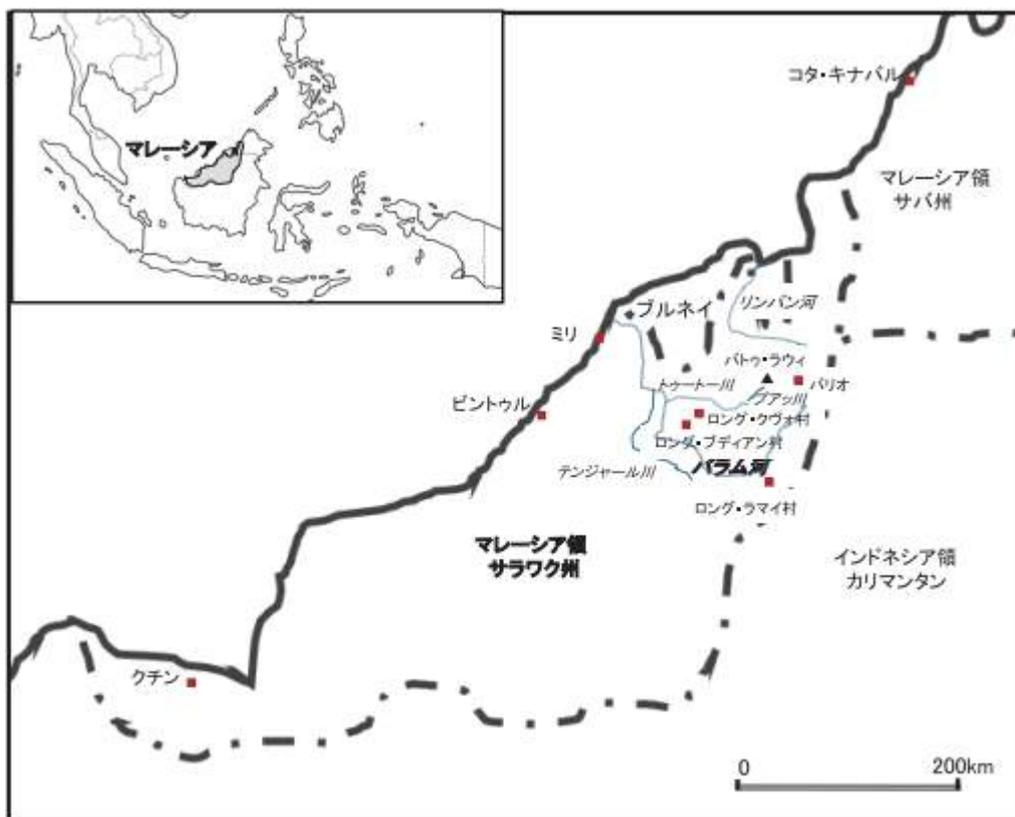


図 1 マレーシア領サラワク州：本文に出てくる主な地名

の死後もプナン人の抗議行動が続く背景には、ヨーロッパ人の活動家の関与や「ブルーノの霊」が力を与えているという噂もあるという（奥野, 2003:8）。

ブルーノ・マンサーがいなくなって 16 年余りが経過した。一方で、彼の生前に設立されたブルーノ・マンサー基金（Bruno Manser Fonds: BMF）は今日まで活動を続けている。他方、プナン人の闘いはその後どうなっているだろうか。本稿では、ブルーノ・マンサーと BMF の活動歴に注目しながら、この間のプナン人の闘いと関連について考えてみたい。

なお、現地調査は、パラム河流域の 3 つのプナン人コミュニティで行なった（図 1）。ロング・クヴォ村（Long Kevok）で 2004 年 3 月、プア川（Puak）流域のモヨン（Moyong）集団に 2010 年 9 月、ロング・ラマイ村（Long Lamai）で 2014 年 3 月に行なった。BMF については、2014 年 11 月に来日したルーカス・ストラウマン（Lukas Straumann）事務局長に対して、最初の聞きとりを行った。2015 年 11 月にクアラルンプールで行われたジャーナリストのルディ・スッター（Ruedi Suter）の講演会と同月ペナン島でも行われた講演会に参加し、同席していた BMF のスタッフに聞きとりを行った。2016 年 2 月には、スイス、バーゼルの BMF 事務所を訪問し、事務局長らに再び聞きと

りを行った。

I プナン人の男

ブルーノ・マンサーは 1954 年 8 月 25 日にスイス、バーゼルで生まれた。高校卒業後、スイス人男性に課されている兵役の義務を拒否し、数ヶ月間投獄された経験をもつ。彼はインドのマハトマ・ガンディの戦闘的非暴力の考え方に影響を受けていた。その後、11 年間羊飼いとしてスイス・アルプスの山麓で暮らした。「木工や木材の伐採、家の建て方、羊や牛など家畜の育て方、チーズの作り方、造園、自分が使う陶器の焼き方などを覚えたり、ナイフを作ってみたり、皮をなめしてみたり」という日々は「ルーツに戻る」試みだったと自身で振り返っている (マンサー, 1991: 279)。しかし、ブルーノは高度に発展したスイスでの暮らしに飽き足らず、もっと根源的な何かを求めていた (Suter, 2015: 58)。彼は図書館でアマゾンやボルネオの先住民について調べていく中で、サラワクに住むプナン人に興味をもった。そして、熱帯雨林での遊動生活に憧れ、プナン人の言語や生活様式を学びたいと考えるようになった。生活に必要なもののほとんどを自分たちで賄うことができる、つまり自律的で循環的な経済に生きる人びとに出会いたいというのがブルーノの望みだった。

1984 年にブルーノ・マンサーはその望みを叶え、以来 6 年もの間、サラワクの森で遊動プナン人とともに暮らした。近眼だったため眼鏡だけは手離せなかったが、当初身に付けていた衣類や靴は全て捨てた。ブルーノは、ことばを学び、狩猟採集に同行し、遊動民の一員となった。後に、彼は次のように述べている。「貧しく、財産をもっておらず、森の中でその日必要な食物を見つけるだけです。でも東京よりもプナンの方に幸せそうな人たちがいっぱいいます」(マンサー, 1997: 45)。ほどなくして、彼はプナン人たちから「プナン人の男 (*Iaki Penan*)」と呼ばれるようになった。

ブルーノが後に「熱帯雨林の英雄」あるいは「熱帯雨林の十字軍」と称され、世界中から注目を集める環境保護活動家になっていくきっかけがあった。それはサラワクの森で 5 歳年下の同じスイス人の男との出会いである。ロジャー・グラフ (Roger Graf) は 1984 年から 2 年間にわたりアジアへ旅に出かけていた。友人とともにさまざまな国々の自然保護区を訪ねた。その後、友人と別れ、ロジャーは 1 人サラワクへと渡った。そのとき、初めてプナン人と接し、「すぐに彼らが静かで、とても親しみやすく、特別な人びとであると気づいた」(Suter, 2015: 95)。

1984 年 12 月 24 日、ロジャーはカヤン人集落のロング・ブディアン村 (Long Bedian) を訪れた。そこで、遠目にブルーノ・マンサーらしき人物を見たが、はっきりとはわからなかった。数週間後、ロジャーはクラビット人とともに 2 日かけてロング・セリダン村 (Long Seridan) まで歩いた。1985 年 1 月に入って村の近くで魚釣りをしているブルー

ノと再会する。彼らは最初英語で話していたが、すぐにスイスなまりのドイツ語に切り替えた。意気投合した 2 人は遊動プナン人の集団を訪ね、2 週間過ごしている。同時に、ロジャーは、プナン人に迫っている危機的状況を目の当たりにし、彼らのために何かしたいと考えるようになった。もちろんブルーノとともに。

会計士の資格をもつロジャーは、帰国後すぐにチューリッヒの出版社に職を見つける。幸い、勤務先は協力的で、空き時間にブルーノから送られてきた手紙やテープなど整理することができた。1986 年からロジャーは「サラワクの最後の先住民族を救え」というキャンペーンを始める。パラム河とリンバン河 (Limbang) の流域のプナン人が暮らす森での商業伐採を直ちに止めるよう、6,78 名の個人と 14 の環境団体や人権団体の署名を集め、サラワク州政府に要請した。

1987 年 3 月、サラワクのプナン人たちはついに大規模な林道封鎖を開始した。ロジャーは、ブルーノ・マンサーを主宰者とする BMF をバーゼルで立ち上げ、その初代事務局長となった。随時サラワクのニュースを発信したり、各国政府や国連などに対して各種の要請を行ったりした。また、ブルーノに関連する資料や映像ソフトのほか、プナン人や他の先住民族が作った籐のカゴや敷物など手工芸品の販売なども始める。

II 熱帯雨林の英雄と国家の敵

ブルーノは林道封鎖を行うプナン人らを鼓舞して回ったため、過激な外国人扇動者として治安当局から追跡された。もとより滞在ヴィザを延長していないので、違法滞在の身であった。州政府の高官らは、ブルーノ・マンサーを「国家の敵」と呼んだ。他の外国人の活動家やジャーナリストも一斉に検挙され、国外に退去させられた。州内の活動家や弁護士も厳しく制限された。

1990 年 4 月、ブルーノはついにスイスに戻る。当時 35 歳の彼は、国際社会にサラワク熱帯雨林の危機を訴えるキャンペーンを始める。それに呼応して、アメリカ上院議会では、サラワクの森林伐採に対して非難決議が採択された。イギリスのチャールズ皇太子はサラワクの森林伐採を民族の殺戮行為に等しいとして指弾した。

当時はサラワクで伐採された丸太の半分が日本に輸出されていた。そのため、ブルーノは日本でもサラワク材の輸入停止を訴えた。1990 年 6 月の環境庁 (当時) での記者会見では、木材業者によって森林資源や食料などが奪われ、プナン人は栄養不足と生活の困窮に苦しんでおり、「人間性や倫理を経済活動と同じくらい重視してほしい」と話した (『朝日新聞』1990 年 6 月 6 日)。同年 11 月には、6 週間にわたってオーストラリア、欧州、北米を回り、その旅程の最後に再来日した。このときは、プナン人のムタン・トゥオ (Mutang Tuo) とウンガ・パルン (Unga Paren)、クラビット人のムタン・ウルド (Mutang Urud) とともに、森を奪われ、生活を脅かされている実情を訴えている。

1992年、ブラジルのリオデジャネイロで開催された環境と開発に関する国連会議において、ブルーノ・マンサーは、マレーシア首相(当時)のマハティール(Mahathir bin Mohamad)と面会している。マハティールは事前にメディアに向けて次のように述べていた。「プナン人に教育を与えて、彼らが開発を望むのか、森にとどまるのか、選ばせたらよい」と(Ritchie, 1994:209)。ブルーノは面会に際し、プナン人が森にとどまることを認めるべきであり、彼らはそれを望んでいると主張した。それに対して、マハティールは「プナン人に選択権があれば、彼らはすべてのマレーシア人が享受している施設やサービスを望むだろう」と答えた(Ritchie, 1994: 209)。33年間にわたりサラワク州首相の座にあったタイプ(Abdul Taib Mahmud)も同様に、森林伐採は「隔絶と貧困を運命づけられた」奥地の森を開拓し、「農山村の半分以上の人びとの生活を変えてきた」と述べる(Ritchie, 2005: 200)。当時、政治の中枢にいた人びとの間では、プナン人の伝統的な生業や生活様式は「原始的」で「遅れている」という認識がにじんでいた。

加えて、タイプの長年の友人で、州の検事総長を務めたジョー・チュン(Joo Chung)は、サラワクの木材輸出は外貨獲得のために多大な貢献をしてきたと語っている。その一方で、プナン人たちは伐採業者に金を要求し、その要求額はエスカレートしていると非難している。林道封鎖を行うのも先住民の自発的意思ではないという。「先住民は頼まれてやっているだけで、NGOから1回につき250~300リングを受け取っているのだ。私にはそんなことを止めることはできない。サラワク(マレーシア)は自由の国なのだから」(Kumar, 2014: 450)。ブルーノ・マンサーをはじめNGOのリーダーたちは、森林保護で金を稼いだら、姿をくらまし、カリブ海あたりのビーチへ向かうとも述べている。

タイプはかつて次のように述べていた。「もしプナン人が森の中を歩き回って狩猟や漁をやりたいなら、そのための一角を保護するつもりだ。その保護区は伐採業者に売ることにはできない。定住が彼らの生存を脅かしかねない開発であるならば、その準備ができていない人びとに我々は定住を強いることはない」(Star, July 3, 1987)。実際、遊動プナン人に特別の森として生物圏保存地域を創出するとも約束していた。にもかかわらず、その約束を破棄したばかりか、すべて伐採してしまった。BMFの事務局長、ロジャー・グラフにとって、この約束が果たされず、またそれにうまく対処できなかったことが大きなショックであった。そして、彼はBMFを去っていった。新たに事務局長として26歳のジョン・クンツリ(John Künzli)が就いた。

1999年3月、ブルーノは再びサラワクに入り、州首相官邸にパラグライダーを使って飛来するという突拍子もない行動に出る。筆者はこのときクチン市内で、両翼にプナン人とタイプと大きく書かれた飛行中のパラグライダーを目撃し、驚いた。着陸後に直ちに逮捕され、即日シンガポールへの強制退国となった。

彼が最後にボルネオ島に入ったのは2000年2月である。インドネシア領カリマンタンで3ヶ月過ごし、熱帯雨林保全のキャンペーンに関する映像をスウェーデンの映画製作チー

ムと撮影した。その後、5月23日、カリマンタンとサラワクの国境を徒歩で越えた。翌日、ブルーノはプナン人の友人を連れてサラワクのバリオ (Bario) を発った (Suter, 2015:161)。その後、ブルーノは友人と別れて、アダン川 (Adang) 沿いに暮らす長年の友人、アロン・サガ (Along Saga) に会いに行くと言って出かけた。途中、彼が好きだった石灰岩峰バトゥ・ラウィ (Batu Lawi) を通りながら。ブルーノの消息はそこで途絶えた。30kg前後のリュックサックも見つかっていない。事故死か、自殺か、他殺か、さまざまな憶測が飛び交った。遺体は見つかっておらず、暗殺されたという疑念も根強く残っている。

失踪後5年が経過した2005年3月20日、ブルーノ・マンサーは死亡したと推定されるとの宣告がバーゼル民事裁判所から出された。5月21日には、バーゼルのエリザベス教会で市民追悼集会が行われた。

III 終わらないプナン人の闘い

1. ロング・クヴォ村

カリマンタンとの国境付近を源流とするバラム河は、中流域でトゥートー川 (Tutoh) 及びティンジャール川 (Tinjar) と合流して南シナ海へと流れ込んでいる。この流域にはサラワクで最も多くの6,000~7,000人のプナン人が暮らしている。

ロング・クヴォ村は、バラム河の中上流域に位置する村である。ちょうど奥地へ延びる伐採道路の分岐点に位置し、交通の要所である。村の近くには、木材伐採のキャンプがある。村の人口は13戸、72人である。村長によれば、彼らがこの地に定住し始めたのは1982年ごろだったという。当時から木材運搬のトラックが頻繁に行き交うようになった。この村は、バラム地域では例外的に林道封鎖に参加しなかった。州政府は1986年にこの地にロングハウスを建設し、月2回医師を派遣するようになった。

その後、ロング・クヴォ村に建設された施設は、小学校校舎、寮、給食施設などであり、それらの施設はまとめて「サービス・センター」と呼ばれる。センター建設に費やされた費用は、50万リングとされる。その後、1991年3月に建てられたロングハウスには50万リングが充てられた。この村のサービス・センター建設には、サムリン社 (Samling) とリンブナン・ヒジャウ社 (Rimbunan Hijau) が出資協力している。両社はともにサラワクの大手木材企業であり、現在では国境を越えたグローバルな多国籍企業として、世界各地の森林伐採事業に進出している。ロングハウス建設時の1986年のロング・クヴォ村の人口は現在の2倍、約150人であった。その後、当初入居していた人たちの半数は、森での遊動生活に戻ったという。2003年9月、ロング・クヴォ村で火災が発生した。幸い人命被害はなかったが、ロングハウスを含むすべての施設が焼失した。村長は政府と伐採会

社に陳情を繰り返し、新たなロングハウスが建設されることになった。

さきの奥野の報告によれば、1996 年以降の林道封鎖の目的は、森林伐採に全面的に反対するというのではなく、適正な森林伐採とそれに対する見返り、住環境、医療環境、教育などの迅速な割り当ての要求である (奥野, 2003:7)。ロング・クヴォ村はそれらの目的をほぼ達成している。しかし、この村で見られるようなプナン人に対する特別の社会経済上の政策 (以下では「公共サービス」とよぶ) が実施されているのは、ごく一部の村にすぎない。州政府は、「公共サービス」についてプナン人を「発展」ないし「進歩」に導く手段と強調しているが、その立案過程には、伐採権を最大限に行行使するために、森の中を遊動しているプナン人を集住させるという意味決定が先にあった (金沢, 2009:144)。

2002 年 6 月上旬に 30 以上のプナン人集落の代表がバラム河上流域のロング・サヤン村 (Long Sayan) に集まり、3 日間の集会をもった。その際、連邦政府、州政府への要望として「ロング・サヤン宣言」が提出された。主な内容は次の通りである。

- ・プナン人の先祖代々の土地でのあらゆる伐採を停止すること
- ・各プナン人コミュニティの先住慣習権を認め、共有林を設けること
- ・補償を提供し、森林と土地の管理に関する公平で開かれた、意味ある協議のプロセスを制度化すること

サラワク土地法では、先住慣習地 (Native Customary Land) という土地区分が設定されている。しかし、プナン人のように、森の中で移動生活を続けていたり、法の施行以後に定住したりした者には先住慣習権が認められない。なぜなら、現行法では 1958 年以前に果樹栽培地、住居地、農耕地、墓地などに使用していた土地に限って先住慣習権が認められる規定になっているからだ。プナン人は州政府に対して、これまで繰り返し土地や森林の先住慣習権を求めてきた。しかし、バラム河流域で最も早く定住したロング・ライ村であっても、それが土地法の制定より後であるため先住慣習権は認められていない。

集会では、サラワク州政府の「公共サービス」にプナン人が採点している。それによれば、9 つのグループが平均点 F という落第点 (Failure) をつけた (Sahabat Alam Malaysia, 2002)。宣言から 13 年後の 2015 年、再び 40 以上のプナン人集落の代表が集まり、声明を発表した (Sahabat Alam Malaysia, 2015)。彼らの土地に対する先住慣習権を求める訴えは変わらず、森林伐採に加え、アブラヤシのプランテーション開発やダム開発に対する懸念が示されている。

2. モヨン集団

モヨン集団は、2010 年にはバラム河中上流域のプアツ川沿いに 12 世帯、45 人が居住し

ている。1990年にラングブラの行った調査では、モヨン集団は11家族44人の構成でほぼ同規模であった(Langub, 1990: 19)。当時は現在よりやや北に位置するトゥマロン川(Temalon)の上流にいたとされる。この一帯はサゴ・デンブンがとれるヤシが自生しており、いわゆる遊動ブナン人の居住地域であった。ブナン人が特に好んで利用するのは、チリメンウロコ属(*Eugeissona*)のヤシである。チリメンウロコ・ヤシは、ボルネオ島の内陸部で広く分布し、急な斜面や尾根に自生している。自生するヤシの量にもよるが、遊動ブナン人は1カ所に数週間単位で滞在する。ヤシの自生地間の距離は数キロと短いものの、移動には数時間～十数時間要する。彼らはサゴヤシの生育状況を予想して、次の遊動場所を決めていた。

しかし、1990年代半ばにこの地が商業伐採の対象となると、州政府や木材企業、NGOなど外部アクターが頻繁に行き交うようになった。まず近隣から宣教師や牧師が訪ねてくる。また、デンマークの篤志家はプアツ川沿いの遊動民に対して、滞在小屋の建設を申し出た。また、別のNGOの提案によって、チリメンウロコ・ヤシの植栽が始まった。他方、海岸部のビントゥルからサバ州コタキナバルまで内陸部を縦断する形で天然ガス・パイプラインの敷設工事が行われている。プアツ川流域の工事をめぐり、マレーシア国営の石油会社であるペトロナス社(Petronas)とブナン人との間でトラブルが発生した。そのためモヨン集団を中心にプアツ川周辺のブナン人は団結して抗議の意思を示すため、滞在小屋に留まって林道封鎖を始めた。彼らの中には、林道封鎖を続けるため数ヶ月森に入っていない者もいる。その一方で現在まで十分な炭水化物を保障してくれるのは、野生のサゴヤシに限られる。こうした状況下で、モヨン集団は家族ごとに交替でヤシの自生地までかけ、相当量のデンブンを滞在小屋に持ち帰ってくる。持ち帰ったデンブンを集団内で共有する。つまり、野生サゴのエコロジカルな知識をもとに、一定の遊動性と共有という行動習慣を最大限に活かしながら、林道封鎖という闘いを続けている。

3. ロング・ラマイ村

ロング・ラマイ村は、バラム河上流域に位置する。同村は650人前後の人口をもつサラワクで最大規模のブナン人集落である。村の中心に建てられたロングハウスに20戸、他の約100戸の世帯は戸別の小屋に暮らす。村の脇をバロン川(Balong)が流れている。

1940年代初めから、このバラム上流域にプロテスタント系の宣教師が相次いでやってきた。ほとんどはオーストラリア人であった。キリスト教がこの地域の人びとに浸透していくにつれ、近隣の農耕民であるクラビット人やサバン人の中から牧師になる者が出てきた。サバン人牧師のラハン・アポイ(Lahan Apoi)は、クリスマスにブナン人たちを自分たちの村へ招待したり、森の中に蓄音機をもって行き、賛美歌を聴かせたりした。森の中での礼拝は何年も続けられ、ラハンは1958年にブナン人への布教活動に専念すること

を決意した。当初プナン人たちは、ブラカ川 (Belaka) 沿いに定住先を求めたが、数ヶ月の間はかなり多くの人びとが集まったため、洪水でできた肥沃な平坦地へと移住した。それが、現在の村の立地地点である。

バラム地域の行政官は 1959 年 11 月にロング・ラマイ村を訪れ、2、3 週間滞在している。その報告書では、聖書を読める若者がいたことが驚きをもって記されている。1960 年代には 2 人の宣教師がロング・ラマイ村に着任した。彼女らは、賛美歌をプナン語に翻訳したり、プナン語の聖書を作ったりするなどして都合 4 年間、この村で布教活動を行なった。1962 年にロング・ラマイ村のある長老が亡くなり、どうやって埋葬するかにかんしてもめぐととなった。プナン人の伝統的な慣習に従えば、遺体はその家に残して、他の者は新たな場所に移動することになる。当時は、キリスト教信仰と伝統的な慣習との間の葛藤が強く残っていた。結局、ジャンガン・カディル (Jangan Kadir) を代表とする親族はロング・ラマイ村から 20 キロほど北上したライ川 (Lai) 流域へと移住した。さらに 1983 年には、タマ・シモン (Tama Simon) を代表とする家族はライ川から 60 キロほど北上したパ・ブラン村 (Pa Berang) へと移動した。

先述の通り、これまで繰り返し彼らの土地の先住慣習権を州政府に対して求めてきた。しかし、バラム河流域で最も早く定住したこの村であっても、それが土地法の制定より後であるため認められていない。そこで、ロング・ラマイ村を含むバラム河上流域の 18 のプナン人集落は話し合いを重ね、2011 年に「平和の森—プナン人からの意見と行動計画、すべての人びとの利益のために—」という構想を発表した (Penan, 2011 ; 金沢, 2015)。この地に多く残る原生林とともに自分たちの生活環境を守っていききたいというのがプナン人の望みである。BMF はこれまで「平和の森」に関連した地図作りやキャンペーンなどをサポートしてきた。2015 年 5 月にアデナン・サテム (Adenan Satem) 州首相 (当時) がイギリスを訪問する機会があった。BMF がお膳立てをし、プナン人のビラン・オヨイ (Bilang Oyoi) がクラビット人のムタン・ウルドとともに、州首相に「平和の森」構想を直訴した。ムタン・ウルドは、ブルーノ・マンサーと世界各国をキャンペーンに回った人物で、その後カナダに亡命し、先住民族の権利を支援する活動を行っている。

2016 年に入って、「平和の森」構想に関して進展が見られた。2016 年 2 月 18 日、サラワク州政府は 18 村のプナン人の代表と協議に応じたのだ (*Malysiakini*, 26 Feb. 2016)。プナン人側の代表として、ロング・ラマイ村のジェームス・ラロ (James Lalo) から正式な要望書が提出された。政府の代表は森林局長のサプアン・アハマド (Sapuan Ahmad) であった。政府代表はプナン人たちの提案を歓迎し、今後さらに村人たちと協力して調査検討していきたいと述べた。プナン人たちは政府の前向きな反応を喜ぶとともに、この地域の商業伐採を放棄するよう重ねて要求した。サラワク州政府が商業伐採に反対するプナン人コミュニティと対話したのはこの 30 年間で初めてであり、BMF も歴史的な会合であると評価している。

IV ブルーノの死と BMF の再生

ロジャー・グラフの後、BMFを引き継いだジョン・クンツリにとって、2000年のブルーノ・マンサーの失踪は予想外の出来事だった。以後4年間、主のいないプレッシャーの中、事実上1人でBMFを支えた。

2004年に新たな事務局長が就任した。当時36歳のルーカス・ストラウマンである。ルーカスは、農業開発の歴史に関する博士論文をもとにした自身の著書を出版している。ちなみに、ブルーノ・マンサーとは一度も会ったことはない。2004年の時点ではたった1人からのスタートだった。事務所の場所を旧事務所から歩いて20分ほどの距離にあるところに移転した。そこでは、資料を保管する倉庫や図書室のスペースなども確保できた。

2016年時点でBMFの正会員は3,900人、そのうち95%はスイス国内在住者である。活動資金は年間約150万スイスフラン(120円で換算して約1億8千万円)である。フルタイムの専従者はおらず、当初から分業型の組織運営を行っている。6名の理事を揃えるが、すべて無給である。事務局長以下のスタッフは、文書担当2人、キャンペーン担当2人、プロジェクト担当1人、資金集め担当2人と総勢8名を数えるまでになった。全員週3〜4日勤務である。ルーカス自身も妻と共働きで、共に子育てに時間をあてる。スタッフには、20代、30代の若手が多い。学生をリクルートするためにBMFが大学の地理学や文化人類学の研究室を訪問することもある。逆に学生からインターンシップの申し出もある。図書室はビジター向けに公開している。

ルーカスの歴史家としてのまなざしは、マネー・ロギングと題された自身の著書にも反映されている。そこでは、長年にわたり、かつ複雑な木材輸出に絡む汚職や不法資金の流れが詳らかにされている(Straumann, 2014)。タイプ元首相の一族は熱帯材輸出の独占体制を築き、日本への木材輸出の許認可を与えてきた。日本の木材輸入に関係する企業はその代わりに香港のペーパー・カンパニーにリベートを支払ってきた。リベート資金はペーパー・カンパニーから投資企業に振替えられて、北米の不動産購入の融資に充てられた。投資企業はタイプ一族によって秘密裏に管理されていた。

出版と同年にタイプは突然州首相を辞任した。ルーカスによれば、それまでの数年間、BMFが展開してきた木材輸出に絡む汚職批判のキャンペーンによって、タイプは追い込まれてきたと見ている。タイプの後任のアデナン・サテムは、就任後直ちにサラワク州の木材大手6社に対し警告を発している。許可地域外の違法伐採に関与しているとの理由からであった。また、違法伐採が改善されるまで伐採ライセンスの新規発行の停止も発表した。

ルーカスの組織運営の特徴は団体や個人のネットワークをより重視している点である。2016年5月には、「ブルーノ・マンサー勇気の賞(Bruno Manser Prize for Moral Courage)」を設けて、初の受賞者として、コメオク・ジョー(Komeok Joe)とピーター・

カラン (Peter Kalang) を選んだ。コメオクは、さきの「平和の森」構想の一角を占めるロング・クロン村 (Long Kerong) の出身者で「マレーシア先住民ネットワーク (Jaringan Orang Asal SeMalaysia)」のメンバーである。現地のプナン人たちと BMF をつなぎ、州政府との交渉役でもある。一方のピーター・カランは「河を救えネットワーク (Save Riers Network)」の代表を務める。サラワクでは近年複数の巨大ダムが建設されてきた。バラム河流域でもバラム・ダム (Baram Dam) の着工が始まり、プナン人を含む多くの流域住民が移住を迫られていた。ピーター・カランは、州の議員や内外の研究者らとともに協働して、バラム・ダム計画を撤回させる原動力となった (谷島, 2016)。

おわりに

ブルーノ・マンサーは「熱帯雨林の英雄」とも「国家の敵」とも呼ばれてきた。しかし、それぞれ外国人や政府高官によるバイアスのかかったイメージであり、ともに暮らしていたプナン人にとっては「ただの男」であった。ブルーノ亡き後、BMF は新たにルーカス・ストラウマンという歴史家を事務局長に迎えた。彼は BMF 内の分業や NGO ネットワークを重視しながら、よりフラットで開かれた組織体制を作ってきた。同時に、サラワクにおける長年の木材輸出に絡む汚職や不法資金の流れを追及し、その利権構造に切り込んだ。

一方、バラム河流域のプナン人たちの闘いは続いている。上流では森林の商業伐採、中流域ではアブラヤシ・プランテーション開発、ダム建設、天然ガス・パイプラインの敷設などに伴い、衝突が起きている。プナン人の土地に対する先住慣習権は依然として認められていない。他方、州首相がアデナン・サテムに代わって、これまでまったく届かなかったプナン人たちの声が届き始めたことは確かである。そうした中、2017 年に入ってまもなく心臓を患っていたアデナン・サテムが急逝した。代わって、アバン・ジョハリ (Abang Johari) が新たな州首相に就任した。「平和の森」構想の行方をはじめ、プナン人の闘いはまだ予断を許さない。

〈参考文献〉

日本語文献

奥野克巳 (2003) 「ブルーノ・マンサーの死とプナン人の闘いの変貌」『JAMS News (日本マレーシア研究会会報)』第 26 号、pp. 6-9。

金沢謙太郎 (2009) 「熱帯雨林のモノカルチャー：サラワクの森に介入するアクターと政治化した環境」信田敏宏・真崎克彦編『開発の風景：南アジア・東南アジアの現場から』明石書店、pp. 119-54。

——— (2015) 「平和の森—先住民民族ブナンのイニシアティブ」 宇沢弘文・関良基編, 『社会的共通資本としての森』 東京大学出版会, pp. 193-212。

マンサー・ブルーノ、山口昌男 (1991) 「サラワクの森：未来へのノスタルジア」 『世界』 第551号、pp. 278-295。

マンサー・ブルーノ (1997) 『熱帯雨林からの声：森に生きる民族の証言』 野草社。

谷島亘 (2016) 「バラム・ダム反対運動はなぜ勝利したのか」 2016年度日本マレーシア学会 (JAMS) 研究大会ポスター発表レジュメ。

英語文献

Kumar, G. Siva (2014) *Taib: The Visionary*, APR New Media Sdn Bhd, Malaysia.

Langub, Jayl (1990) A journey Thorough the Nomadic Penan Country, *Sarawak Gazette*, Vol. CXVII No. 1514: pp. 5-27.

Penan (2011) *The Penan Peace Park: Penans self-determining for the benefits of all*, 2017年1月31日最終アクセス、http://www.penanpeacepark.org/resources/2012_Penan_Peace_Park_Proposal_English.pdf よりダウンロード

Peace_Park_Proposal_English.pdf よりダウンロード

Ritchie, James (1994) *Bruno Manser: The Inside Story*, Summer Times, Singapore.

——— (2005) *Abdul Taib Mahmud: 41 Years in the News*, Wisma Printing, Malaysia.

Sahabat Alam Malaysia (2002) Press Release: Penan Community Meeting and Anniversary of the Sarawak Penan Association 7-9 June, 2009年9月9日最終アクセス、<http://surforever.com/sam/pressrelease/reportcard.htm> よりダウンロード

——— (2015) *Penan Land Rights in Sarawak: 13 years after the Long Sayan Declaration 2002*, Sahabat Alam Malaysia.

Straumann, Lukas (2014) *Money Logging: On the Trail of the Asian Timber Mafia*, Bergli Books, Switzerland.

Suter, Ruedi (2015) *Rainforest Hero: The Life and Death of Bruno Manser*, Strategic Information and Research Development Centre, Malaysia.

(かなざわ・けんたろう 信州大学)